論文の内容の要旨

論文題目：　戦後日本文学の〈黒人〉
　　―文学／芸術／政治運動と黒人表象（1945-1961）―

氏　名　：　西田桐子

本論文では、日本文学における黒人表象の傾向と特徴、そして変遷を明らかにすることを目指した。日本語で書かれた文学作品に登場する「黒人」を実証的かつ総体的に探究することで、日本文学における黒人表象史を立ち上げることを目的とし、それと同時に、〈黒人〉が戦後日本文学にもたらした「文学的想像力」を明らかにした。

1945 年から 1961 年にかけて発表された、日本語で書かれた文学作品を主たる分析対象とする。実証的な探究の礎として、文芸誌や文学全集等の調査を行い、「黒人」に関連する言説を収集した。それらの種々の言説のうち、「黒人」が登場する小説については、参考資料に収めた【資料 1】〈黒人〉小説年表（1945-1961 年）にまとめた。【資料 1】が示すように、小説に限定しても、当該期に五十を超える「黒人」が登場する作品の存在を確認できた。本論文では、小説を中心に、詩、短歌、ルポルタージュ、エッセイ、翻訳、映画のシナリオ等を含むさまざまなジャンルの文学作品の黒人表象を分析することで、作中の「黒人」が果たす機能や役割、または象徴性だけではなく、「黒人」が生み出されたイメージの源泉を探り、時期による特徴や傾向を明らかにした。作品分析の際には、著名な作品だけではなく、従来の日本近代文学研究では注目されてこなかったような作品も、黒人表象史を編む上で重要だと判断した場合には、積極的に取り上げた。

作品分析という方法論に加えて、映画・美術・音楽等と文学の関係といったクロスジャンル的探究や、文芸誌や機関誌などの雑誌や新聞等を対象としたクロスメディア的な言説分析、文字テクストの翻訳に限らない外国文化の影響受容関係の探究など複数の比較文学

的アプローチを行い、多角的な視点による分析を行うことを目指した。その際には、国際的な政治情勢や国内外の社会的文化的状況や、研究や出版も含めた日本の文学場の動向には特に注意を払った。

調査の結果、日本の文学者による文学／芸術／政治運動が、戦後日本文学の黒人表象と密接に相関していることが明らかになった。本論文で扱う 1945–1961 年という時期こそ、黒人イメージの戦後的源泉の主たるものが出揃っていく時期であり、その意味で、本論文は、戦後日本文学の黒人表象の起点を探る探究となる。戦後日本文学の〈黒人〉は、多くの文学者たちが参与した 1950 年代を中心に隆盛した前衛的な諸運動―文学運動であり、しばしば同時に、芸術運動かつ政治運動でもあるような運動―によって、その輪郭が形作られたといえるのである。そうした運動の中で育まれた新たな黒人イメージこそ、抵抗と革命の象徴としての〈黒人〉である。

本論文は、四部七章構成で、序章と終章を加えた全九章からなる。

第一部では、占領期から講和期にかけての、黒人表象と文学者の反米的政治運動の関係に着目する。検閲と黒人表象の関係を明らかにした上で、文学者の政治的な運動への参与と黒人表象の関わりについて、主に共産主義と平和運動に着目して探究する。

第一章においては、占領が黒人表象に与えた影響を明らかにする。一節では、検閲が黒人表象に及ぼした影響を明らかにする。検閲条項と実際の検閲例の双方を検討することにより、検閲期において文学作品に「黒人」を描いて発表することが、事実上、困難な状況にあったことを示す。二節では、文芸誌『新日本文学』の調査をもとに、1949 年にアメリカで起きたピークスキル事件と黒人に対する関心の高まりの関係に光を当てる。ピークスキル事件で重要な役割を担ったユダヤ系アメリカ人で当時共産党員だった小説家ハワード・ファストとアフリカンアメリカンで公民権運動家の歌手ポール・ロブソンに、文学者の関心が集まった背景には、占領と冷戦により高まりをみせた反米感情と平和への希求があり、ロブソンの世界的な活躍によって、日本の文学者は、黒人を芸術家による運動の先駆者としてみなすようになっていく。三節では、ピークスキル事件ブームの影響が窺える、西野辰吉「米系日人」（1952）の黒人表象を検討する。「米系日人」の「黒人兵」は、立派な人間性を備えた知的で理性的な人物として、敬意を込めて描かれている。

第二部では、主に芸術運動に着目し、文学だけではなく美術や音楽を含む外国文化の移入が、黒人表象に与えた影響に焦点を当てる。戦後文学者も多く参与し盛り上がりを見せた文学／芸術運動の渦中で、移入された黒人に関する言説やイメージは、しばしば芸術理念や運動の理論と連関し、その変化とともに変奏されていった。

第二章では、日本における「黒人文学」受容とその影響を、詩の分野を中心に検討する。一節では、日本のアフリカンアメリカン文学受容の歴史において、記念碑的刊行物となる『黒人文学全集』に着目する。『黒人文学全集』の刊行に関わった人物と集団の両面に留意して成立背景を示すとともに、その出版の意義や影響について明らかにする。二節

では、『黒人文学全集』の編集者であり、「戦後詩」運動の旗手でもあった木島始に焦点を当てる。日本の「黒人文学」受容の先駆者である木島は、「黒人文学」受容の黎明期となる 1950 年代初頭から「黒人詩」を日本に紹介し始め、それは政治的な文学運動やジャズの受容とも深く関わっていた。三節では、寺山修司に着目し、1950 年代後半以降の「黒人文学」の広まりとその影響について検討する。寺山のラングストン・ヒューズ受容を中心に検討することで、木島による「黒人文学」の翻訳が詩壇に与えた影響を、ジャズやブルースといった「黒人音楽」との関わりも含め、明らかにする。

第三章では、先行研究ではほぼ言及されることのなかった「黒人芸術」をはじめとする、西欧由来のアフリカの黒人に対するイメージに着目する。さらに、「黒人芸術」受容を、1950 年代末から高まりを見せるジャズブームへと接続することを試みる。一節では、岡本太郎の「黒人芸術」受容に着目する。両大戦間期のパリで「黒人芸術（art négre）」に出会った岡本は、戦後に自身の芸術論を展開する中で、「黒人芸術」を、停滞し閉塞した現代社会の状況を革新する可能性をもつ芸術として、日本に広く紹介した。二節では、岡本太郎と花田清輝の共闘関係を軸に、文学者も数多く参加した戦後前衛芸術運動の中で生成されていった黒人イメージについて検討する。前衛芸術運動の渦中において「黒人文学」受容と「黒人芸術」受容が合流した先に、「黒人音楽」受容としてのジャズブームがあるという構図を描き出すことにより、黒人イメージが、芸術的な「アヴァンギャルド」と結びついていく過程とその様相を探った。三節では、1960 年代前半の倉橋由美子の小説を例に、二部を通して検討してきた黒人に対する諸イメージが、文学作品にいかに反映され、創造的に変奏されていったのかをみる。「黒人」に自己投影することもあった倉橋の小説には、黒人ミュージシャンや同性愛行為をする「黒人」が登場する。女であり芸術家であることの存在論的探究と、ジャン・ジュネやボーヴォワールをはじめとするフランスの文学や思想の影響によって、倉橋は革新的で奇妙（クイア）な「黒人」を産み出したのである。

第三部では、「黒人混血児」と「黒人兵」という、戦後の日本に出現した実在する黒人の表象に着目する。新聞や雑誌というメディアや、映画・ルポルタージュ・「記録芸術」といった芸術ジャンルを横断し、1950 年代の文学作品における「黒人混血児」表象と「黒人兵」表象の傾向と変遷を探る。

第四章では、「混血児」の成長とともにダイナミックな変遷をみせる 1950 年代の「黒人混血児」表象を探究する。一節では、「混血児ブーム」ともいえる現象が起きた講和期に着目する。雑誌『婦人公論』を中心に、沢田美喜、高崎節子、野上弥栄子、パール・バックなど、主に女性の手による「黒人混血児」を巡る諸言説を横断的に検討する。二節では、獅子文六の新聞小説「やつさもつさ」とその映画化に光を当てる。最初期に「黒人混血児」を書いた「やつさもつさ」は、翌年映画化される。映画の脚本を原作小説と比べることで、「混血児ブーム」の収束にともない日本社会への浸透をみせる「黒人混血児」イメージの変遷を明らかにする。三節では、杉啓之による小説「ペイパー・ムーン」(1958)と、日本社会に衝撃を与えた映画「キクとイサム」（1959）を検討することで、「黒人混血児」表象の典型と、

「混血児」の成長がもたらした「黒人混血児」表象の新たな転換を探る。

第五章では、1950 年代中頃から 1960 年代初頭にかけて発表された小説の黒人表象を分析する。この時期に、「黒人兵」が主要登場人物となる小説が増え、人種が主題となる作品が目立つようになる。第五章では、小島信夫「アメリカン・スクール」（1954）と堀田善衛「曇り日」（1955）に着目する。両者はともに、占領期の「黒人兵」を象徴的に描くことで、敗戦と占領により鬱屈する日本人男性の姿を浮かび上がらせる。二節では、吉野壮児の「断層」（1958）と小林勝「その席がない」（1960）という、ともに人種を主題の一つとする無名の二作品における黒人表象を検討する。この二作は、アメリカの白人と黒人に対する黄色い日本人という構図による人種的考察を試みているという点においても共通する。

第六章では、およそ日本文学史上最も著名な〈黒人〉小説であり、同時期に発表された二作、大江健三郎「飼育」（1958）と松本清張「黒地の絵」（1958）の黒人表象を検討する。多くの共通点をもつ二作品を比較し、「記録芸術」と戦争犯罪という新たな視点から読み直すことで、豊かな「文学的想像力」により描き出されたがゆえに例外的な表現を多く含む「飼育」と「黒地の絵」を、黒人表象史に位置付けることを目指した。

第四部は、アジア・アフリカ作家会議東京大会（以降、AA 東京大会）という、戦後日本文学の黒人表象史における一大転換点を扱う。AA 東京大会は、日本文学史上初めてのアフリカとの出会いであり、この頃より、〈黒人〉は、単なる「黒人」ではなく、「アフリカ黒人」やアメリカの黒人、カメルーンの黒人というような分節化を見せるようになる。

第七章一節では、AA 東京大会の概要を示し、その開催の経緯を明らかにすることで、安保闘争と戦争責任が、日本の文学者の大会への参与を強力に後押ししたことを示す。二節では、日本の文学者たちが AA 東京大会にみた連帯と共闘の夢に着目する。希望を抱き大会に臨んだ文学者たちは、さまざまな齟齬に直面することとなる。三節では、AA 東京大会が、戦後日本文学に及ぼした影響について検討する。多くの日本の文学者は、この大会で初めてアフリカ（人）と対峙することになり、無知を自覚する。大会開催を契機として、アフリカ理解への扉が開かれるとともに、文学作品の黒人表象も大きな転換を示す。

日本文学に戦後新たに登場した〈黒人〉は、実在の「黒人兵」や「黒人混血児」を描いた〈黒人〉だけではなく、1950 年代を中心に隆盛した文学／芸術／政治運動の中で育まれた政治的かつ芸術的な「アヴァンギャルド」としての〈黒人〉である。公民権運動・反帝国主義的独立運動・平和運動などの政治的側面と、「黒人文学」「黒人芸術」「黒人音楽」といった芸術的側面の両面において、被抑圧者でありながら革新の可能性を体現する存在としてみなされた黒人は、敗戦後の日本人の共感や同情、もしくは憧れや敬意の対象となり、文学者はしばしば戦後的モチーフの一つとして「黒人」を描いた。抵抗と革命の象徴としての「黒人」は、戦後日本文学の〈黒人〉の新たな源流となっていく。